

二〇一九年度 第一回入学試験問題

国

語

(五十分)

この冊子さつしには、

文章一

文章二

の二つの文章があります。

都市、公園、緑地と聞くと、ぼくはすぐモンシロチョウとスジグロシロチョウのことを考える。

昔の東京にはモンシロチョウがたくさんいた。車などたまにしか通らない第二次大戦中の東京では、道ばたのどこにもモンシロチョウが飛んでいたような気がする。

空襲で東京の大部分が焦土と化しても、戦争が終わった翌年には、もうどこからやってきたのか、白いチョウたちの姿がひらひらしていた。

そのころは東京のかなり町なかにもちよつとした畑地が残っていた。世田谷、杉並などはまだまだ都市というより田園地帯であった。モンシロチョウたちはそこらじゅうにいた。そして今ではまったく見られぬふしぎな現象がおこっていた。

それは、夏になるとモンシロチョウがものすごく小さく①なってしまうという現象であった。

それまで飛んでいたモンシロチョウが、一夜にして小さく

なるわけではもちろんない。夏にあらわれてくるモンシロチョウが、小さいものばかりになってしまおうということなのである。

そのような小さなモンシロは、極端にいえば春のもの半分ぐらい。中にはシジミチョウほどの小ささで、モンシロシジミと呼ばれるくらいのものでいた。

この現象はかなり古くからおこっていたらしく、昆虫学者の横山桐郎氏が動物学雑誌に長い論文を書いている。(横山桐郎「夏生紋白蝶翅斑の変異」動物学雑誌34卷(一九二二—一七八—一九二二—ページ)

そして秋になると、また春と同じ大きさの、ふつうのモンシロチョウばかりになるのである。

戦後ぼくはこのことにいたく興味を抱き、その原因を調べてみた。

理由は簡単であった。当時、キャベツ、ダイコン、カブ、ハクサイなどといったアブラナ科の野菜類は、夏にはとうが立って(花が咲いて)枯れてしまうので、七月から八月にかけてはこの畑にもまったく栽培されていなかった。

周知のとおりモンシロチョウの幼虫は、アブラナ科植物の葉を食べて育つ。ところが初夏のキャベツで大量に増えたモ

ンシロチョウが一斉に親のチョウになる七月には、もはやキヤベツも菜っ葉もない。しかたなくチョウたちはペンペングサとかイヌガラシとかいう野生のアブラナ科植物に卵を産む。

X 化が進んでいたとはいえ、東京の道ばたにはこういう「雑草」がたくさん生えていた。モンシロチョウたちはこういう草に次々と卵を産みつけていたのである。

ところがこういう野生の草の葉は小さい。そこへ大量の卵が産みつけられる。必然的に幼虫たちは、十分に餌が食べられない。しかし季節は真夏で暑いから、発育はどんどん進む。結果的に幼虫たちは、小さな小さなチョウになってしまうのである。

これが、夏の東京で毎年のようにおこっていた小さなモンシロチョウ異変の原因であった。秋になって菜っ葉類の植えつけが始まると、また春と同じ大きさのチョウたちがあらわれてくるのである。

東京でおこったもう一つの異変は、一九七〇年代の初めごろに気づかれるようになった。それは東京という大都市におけるモンシロチョウとスジグロシロチョウとの入れかわりである。

上に述べたとおり、それまでの東京にいた白いチョウは、そのほとんどすべてがモンシロチョウであった。

スジグロシロチョウというのはモンシロチョウとごく近い仲間のシロチョウで、姿・形も色もよく似ているが、はねの翅脈が黒いのでスジグロという名がつけられている。これはごく日かげのところにしかいない、東京ではむしろ珍しいチョウであった。

ところが、一九七〇年代の初めごろから、東京にこのスジグロシロチョウが増えだした。

白いチョウが飛んでいる。モンシロチョウだと思っていたと見ていると、どうも飛びかたが少しちがう。モンシロチョウなら飛ばないはずの日かげや梢の上を飛ぶのである。捕まえてみるとスジグロシロチョウだった。

こういう事例が多くなると、モンシロチョウはどうしたのかが気になった。注意して見ていると、モンシロチョウは明らかに減っているようであった。

そんな事態を見ていて、チョウ好きの人々はいろいろと憶測した。去年の冬が寒すぎたからだという人もいた。しかし冬が寒かったらスジグロが増えるのか？ ぼくは変なことを考えた。スジグロシロチョウが増えたのは、東京に高層建築

が増えたからではないだろうか、と。

モンシロチョウは元来、中国大陸の平野部にいたチョウで、それが海を渡^{わた}って日本にもやってきたのだろうと考えられている。

彼らは日がよく照る開けた場所が好きであり、体もそのようにできている。たとえば強い日射しに照らされても体はそれほど熱くならないが、林の中や曇^{くも}りの日は体が冷えてしまうので苦手である。

一方、スジグロシロチョウのほうは、昔から日本に住みついていた。中国大陸の平原とちがつて森や林ばかりの日本で生まれたこのチョウは、林の木もれ日の環^{かんきょう}境を好み、そういう場所の弱い日ざしを受けて体温を保ちながら生きていくようにできている。けれど、太陽にがんがん照らされると、体は過熱して熱麻痺^{まひ}に陥^{おちい}り、飛べなくなってしまう。このことは実験的にも確かめてみることでできた。

つまりモンシロチョウは開けた場所のチョウであり、スジグロシロチョウは林の中のチョウなのである。

あのころの日本経済の繁栄^{はんえい}によって東京に高層建築が増えはじめると、東京という都市の中心部は、高い建物の陰^{かげ}が増え、日かげの多い林の中と同じ状況^{じょうきょう}になったのではないか。

そうすると、日なたの好きなモンシロチョウは住みにくくなる。明るい公園やお堀^{ほり}端^{ばた}ぐらいがよく日の当たる場所となり、それ以外は日かげの多い林と同じ、生活にも繁殖^{はんしよく}にも幼虫の発育にも具合の悪いところになってしまう。

けれど、片や日かげの好きなスジグロシロチョウにとつてみれば、高層建築が増えたことはも^④つけの幸いであった。昔の平たい東京とはちがつて、あちこちに日かげができ、ちよど林の中にいるようなものだ。

そればかりではない、日なたより日かげを好むムラサキハナナ(オオアラセイトウ)というアブラナ科の植物も、その紫色^{むらさき}の花が人間に好まれて、あちこちにたくさん植えられるようになった。野草ではなく栽培植物だから葉も大きく、幼虫の食物としてもうつつけであった。

これらのことが原因になって、東京ではスジグロシロチョウが増えはじめ、日なたを好むモンシロチョウは減ってしまったのではないか。ぼくはそう考えたのである。

ぼくのこの想像があたっているかどうか、まだよく分らない。今、いろいろと調べているところである。

けれど、東京でそういうことが可能になったのには、公園緑地が大きな役割を果たしたと考えられる。

東京は家や建物の立ち並ぶ大都市であるが、思ったより公園や緑地が多い。その多くは明るく整備された近代的公園であるが、こういうところはあまり意味をもたない。明るいからモンシロチョウの住む場所には向いているかもしれないが、「雑草」は征伐して清潔な明るい公園にしているから、そこでモンシロチョウが育つことはできない。

けれど、明治神宮をはじめとするいわゆる「社叢」^{しゃそう}には、木がかなりこもり茂^{しげ}っていて日かげが多く、「雑草」もまだたくさん生えている。こういう場所にはモンシロチョウはほとんど居^おらず、スジグロシロチョウが住みついている。いったん東京の町に高層建築ができれば、日かげが増えだすと、こういう自然の林に近い緑地や公園にいるスジグロシロチョウが、次第に高層建築の生み出した新しい「林」に進出していったのではあるまいか？

その結果として東京には、モンシロからスジグロへという種類^{しゆ}の入れかわりはあったにせよ、白いチョウが街の中をひらひら舞^まうという、何となく心安まる状況が残ったのだ。

二十世紀初めの三年ほどにわたっておこなった文部科学省の科学研究費による調査などの結果を見ると、大阪ではどうもそのようになってはいないらしい。急速に近代的大都市と

なった名古屋でも事情は東京とはちがうらしい。

東京の公園緑地がどのようなポリシーのもとに作られてきたのか、ぼくはまだよく調べていないが、それができるだけ自然な林や森を目標にしていたとはあまり考えられない。多くの公園は、むしろ自然のままの草や木を生やしたものよりも、もっと明るくて「雑草」も「雑木」もない、「近代的」で「都市的」な公園を目指していたと思われる。

そういう公園はモンシロチョウも住みつかせず、スジグロシロチョウも育てず、街をわびしく心の安^{やす}らぎのないものにしていくのに貢献^{こうけん}した。

けれど幸いにして自然に近い状態が残っていた公園や緑地もあつたから、大都市東京にはまだチョウがいる。

街の中を白いチョウが飛んでいるかどうか、そんなことどうでもよいと思われるかもしれない。しかしそういう状況があるかないかということによって、何か心の安^{やす}らぐ都市になるかどうかとも決まるのである。

その意味では、公園緑地をどう作るかは、人と自然、都市と自然を考える上で、まことに重要な課題であると思う。

(日高敏隆『生き物たちに魅^みせられて』青土社より)

文章二

「やーだあ、おんぶ。しいちゃんねむいの、おんぶー」

二、三歳さいくらいの子の女の子がしゃがみこんで動かなくなっている。お母さんらしい人が大きな荷物とベビーカーを抱かかえ、ぐずるその子をいっしょうけんめいなだめていた。

「しいちゃん、もうちよつと、あともうちよつとがんばろ？
そうだ、お外にアイス売ってる、ね、あつちでアイス食べよ？」

しいちゃんと呼ばれた子はちらつと顔を上げ「アイス食べる」と言った。

「じゃあ行こつか、ほら立って」

「やーだああ、おんぶ、おんぶでアイスたべるうう」

うわあ、めんどくせえ。

うんざりしていると、柵ししゆがちらつとおれを見てきた。さつと目をそらすと、風知ふうちもおれを見ていた。なんだよ、ふたりとも。

「この駅、エレベーターないみたいだね」

「しっ、知らねえよ。おれに言うなよ駅に言えよ」

他人に手を貸すのなんかもううんざりだ。無視して親子連れのをすりぬけようとしたとき、「やーだあああ！」足

もとにごろんとなにか転がつてきた。「うおっ」危あやうく踏ふみそうになる。「しいちゃん」だった。

「いいいやああああ、あいすううううう、おおんぶううううううう」

手足をばたばたさせながら泣き叫なげんでいる。

「あつ、ご、ごめんなさい、しいちゃん、ほらどきなさい、お兄ちゃんたち通れないでしょ、しいちゃん！」

「いいいやあああああああ——！」

こんどはごろごろ転がりながらお母さんの手から逃にげまわっている。

チビながらなかなか根性のあるやつだ。と、柵が
進みでて身をかがめた。

「服よちが汚れちゃうよ？」

そばにしゃがんで顔をのぞきこむ。びたりと鳴き声やんだ。

「それじゃ背中痛くなるよ。ほら、立っていっしょに行こ？」

にこつと笑って手をさし出す。出たな、このほほえみ王子。
「……」しいちゃんは無言でもう二回ほどごろごろしてみせると、やがて手を出して柵の手をにぎった。よいしょ、と立たせてもらう。

うわ、小っさ。あまりの小ささにびっくりする。

これくらいのサイズのやつどこかで見たと思ったら、通路に立っている「飛びだし注意」の看板だった。

「ほんとにすみません、どうもありがとう」しいちゃんのお母さんは娘の涙と鼻水をふきながら、なんども頭を下げています。

「いえ」と柗がかぶりを振って、「じゃあ、ぼくといっしょに上ろうか」と言った。しいちゃんはしつかりとその手をにぎったままくりとうなずき、それから当然のようにもう片方の手をつき出した。

「えっ、ぼく？」

柗と風知に両側から手をつながれ、しいちゃんはようやく階段を上りはじめた。おれだけ **B** 残される。

「……女王様かよ」

あいつらもあいつらだ。自分だけさつきと行きやがって。と、その横でお母さんがあわただしく荷物を抱え、自分も階段を上りはじめた。たたんだベビーカーと、重そうなバッグを持ってよろよろとあとをついていく。

④ おれはぎゅつと目をつぶり、それからぱつと顔を上げた。階段を駆けのぼる。「あの——」

そのとき、目の前に **C** 小さな靴が落ちてきた。上の段でしいちゃんが、靴の脱げた自分の右足を見下ろしていた。

「——いやああああああ」

⑤ つぎの瞬間、そっくり返った小さな体がおれめがけて

降ってきた。

「ごめんなさい、ほんとにごめんなさい」

「いえ……」

おれはしいちゃんを背中におぶったまま改札をくぐった。こともあろうにこのチビは、自分が靴を落としたのにかんしゃくを起こして、場所も考えずに後ろ向きにダイブしたのだった。どうにか倒れずに受けとめたけど、もつと高い場所だったらと思うとぞつとする。

「ほんとに、ほんとにもう、あなたがいないかったらたいへんなことに」

「はあ、あ、いえ」

しいちゃんは小さくてふわふわしていたけど、背負うとけっこう重かった。いろんなものが **D** 詰まってる感じがする。

「ベビーカー、ここでもいいですか」

柗が言ってベンチの前に据える。風知はおれのリュックを運んでいた。

「どうもありがとう。ほんとに助かりました」しいちゃんのお母さんが手をのばして受けとろうとすると、背中の子はぎゅつと腕をまわしておれの首にしがみついた。

「いやっ。アイスっ」

「しいちゃん！ いいかげんにしなさい」

さすがに厳しい声でしかられてしいちゃんはべそべそと泣きはじめた。

「ごめんなさいね、イヤイヤがひどくって。ほら、降りなさい、お兄ちゃん苦しいのよ」

ようやく背中が軽くなる。「すみません、重かったでしょう」お母さんはそう言って笑顔を見せたけど、ちよつと顔色が悪かった。一日じゆうこんなチビの相手してるんじや、そりや疲れもするだろう。

「あいすうううう」さめざめと泣くしいちゃんを見て、こんどは風知が言った。

「あの、あのうぼく、よかったら買ってきましょうか？」

駅前のスタンドにソフトクリームの看板が立っている。お母さんはほっとした顔で、

「ごめんなさい、じゃあ、お言葉に甘えてお願いしていいかしら。あの、それから、あなたたちのぶんも必ず買ってきてね」

お金を渡そうとしてくるので、みんなであわてて断った。

「そんな、だいじょうぶです」「ぼくたちさつきかき氷食べたばかりで」「ほんとほんと」

けれどしいちゃんのお母さんはゆずらなかつた。

「ううん、あなたたちのおかげでも助かったの。だからちゃんとお札をさせてちょうだい。ね？」

⑦ 押し問答の末、結局、しいちゃんはソフトクリームを、おれたちはアメリカンドッグを買ってもらって、みんなでベンチに座って食べた。

「卒業旅行？ 三人だけで？ うわあ、六年生つてもうそんなことできちゃうの。すごいねえ」

心底感心したように言われ、ちよつと恥ずかしかった。

「いや、そんな、たいしたことじゃないです……」

おれはちらつと風知を見た。

ほら、今チャンスだろう、アルバムを頼めばいいのに。視線を送つてうながしてみたけど、風知は気づかないのかもくもくとアメリカンドッグをかじっている。

なにやってんだよバカ。

と、そこでいらいらしている自分にハツとする。べつにカシケーねえじゃん、おれ。

「あと E したら、この子もお兄ちゃんたちくらい大きくなるのかなあ。そんな日が来るなんて、ちよつと信じられないわね」

くすくす笑って小さな娘に目をやる。しいちゃんは終にべつたりくつついて、真剣な顔でソフトクリームをなめていた。

ふうん。このチビがおれたちと同じ歳だったら——。想像したとたん背中がぞくりとした。無理無理、こんなの同じク

ラスにいたら、ぜったい勝てる気がしない。

しいちゃんのお母さんはおれたちの買ってきたお茶をゆつくりと飲んでいる。さつきよりだいぶ顔色がよくなった。

「本当に、どうもありがとう。旅行、気をつけていってらっしゃいね」

しいちゃんとお母さんは、なんども手を振りながら帰っていった。ベビーカーからのぞく小さい手足が、いつまでもぼたぼたと動いていた。

「なんで頼まなかったんだよ」

ふたりが遠くなったところ言ってみた。

「せっかくチャンスだったのに」

風知は下を向いて今さらのように卒業アルバムを抱えている。

「頼もうと思ったよ、最初は。でも、でもさ——なんかやっぱり、ずるいかなあって」

「ずるいってなにが」

「だってさ、あるとき『書いてください』って頼んだら、すぐに書いてくれたと思うよ、きつと。でも、でもさ、『ああ、書いてほしかったから親切にしたのかな』って、そう思っちゃうかなって……」

「はあ？ それがどうしたよ。べつにいいじゃんそんなの」

「だめだよ。だって、助けようって思ったのはあのお母さん

が困ってたからでしょ？ ほんとに大変そうだったし、しいちゃんもかわいかったし、ぼくは、だから手伝ったんだ。柘も天馬もそうでしょ。けどそれがぜんぶ、うそになっちゃう。ぼくのせいで、みんなの気持ち^⑧がそんなふう^⑧に思われるの、いやだよ」

おれはぼかんと口を開けた。

「はあー？ ぼっかじゃねえの、おまえ。意味わかんねえ。そんなこと言ってたら終わらないだろ！ じゃあ、あれかよ、あの課題って、べつにできてもできなくてもどっちでもいいみたいなの、ユルいやつなのかよ？ 冗談^{じょうだん}じゃない、だったら手伝えなんて最初から言うなよ！」

言ってるうちにだんだん腹が立ってきた。風知も負けじと言いかえしてくる。

「わかってる、課題はやるよ。ぜったいぜったい終わらせる。だってお父さんとの約束だし——」

「へえ、じゃあどうすんだよ！ あと八人分、夕方までに集めないとなまずいんだろ。見ろよ、まだぜんぜんじゃないか。それでほんとにやる気あんのかよ」

「あるよ！ あるよ、でも」

「天馬、風知——」

そのとき後ろからおおずとおおずと声をかけられた。

「ねえ、あの、なにを集めるの……？」

ぎよつとしてふり向くと、さつき^⑨の親子がふたたびそこに立っていた。

ベビーカーに乗ったしいちゃんが、片方靴の脱げた足をぶんと蹴りあげていた。

「遠慮^{えんりよ}しないで、すぐ言ってくれたらよかったのに」

しいちゃんのお母さんは、笑いながらペンを持ってさらさらと書いてくれた。

「しいちゃんも、しいちゃんもー！」

「はいはい、この子も書いていいのよね？」

「あ、はい」

「ラッキーだったな」こつそり言っつつくと、風知は照れくさそうにうなずいた。

しいちゃんの脱げた靴はベンチの下にあった。袴がひざまずいて履かせてやっている。しいちゃんはおとなしく足を出していた。「王子かよ」「王子だね」おれと風知はこそこそと言いあった。

それから全員でカメラに収まった。しいちゃんはちゃっかり袴に抱っこだされていた。

「ねえ。その写真、わたしももらっていいかしら」

しいちゃんのお母さんは風知と携帯けいたいでやりとりしている。自分のスマホで画像を確認すると、そこで初めて、ちよつと

だけ心配そうな顔をした。じつとおれたちを見る。

「あのう、あのね、これはほんとはいけないお世話なのかもしれないけど——」しばらくためらったあと口を開いた。

「あなたたち、卒業旅行の記念に、出会った人たちからアルバムに書いてもらっているのよね？ それはとてもいい経験だと思うのよ。知らない人に声をかけて、きちんと説明して、自分で交渉こうしょうして。立派な社会勉強だと思う。でもね、ちよつとだけ心配なの。あなたたちは礼儀れいぎ正しいし、とてもしっかりしてるけど——でもほら、世の中には、やっぱり悪い人もいるから」

おれたちはぎくりとして目を合わせた。もぞもぞと下を向く。

「だから、約束してくれないかしら。話しかけるのは——そうね、たとえば、ちゃんとしたお店の人とか。それから……あつ、ほら、こういうところの駅員さんとか？」

「はあ……」もうもらいました、と言いついなるのを袴が横でそつと制した。

「これからはできるだけそういう人を選んで話しかけてみない？ あなたたちには、いい思い出だけ持って帰ってほしいもの」

そのあとしいちゃんのお母さんは、「どうか、くれぐれもお願ねがいします」とおれたちに向かって頭を下げた。大人相手^⑩

にするみたいだった。

「あつ、は、はい」「わ、わかりました」「そうします」

あせつて口々に返事する。しいちゃんのお母さんは嬉しうににこつと笑った。

しいちゃんはじつとしてに飽きたのか、さつきからベビーカーをガタガタとゆすっている。「あつち、はーくあつちー」「はいはい」

ふたりはこんどこそ手を振って帰っていった。

アルバムの開いたページには、きれいな字でこう書かれていた。

へ強くて、やさしくて、かっこいいお兄ちゃん。どうかあなたちの人生に、よいことがたくさん、たくさん、たくさんありますように

その横にぐちゃぐちゃの判読不明の線があつた。しいちゃんのサインだった。

おれたちはしばらくそれをながめていた。

顔がにやけそうになって、「ふん」と鼻息でこまかす。

なんか嬉しかった。これは風知のアルバムだったけど、この言葉は三人に向けられたものだと思う。だって「F」って書いてあるし。

(市川朔久子『よりみち3人修学旅行』講談社より)

国語(一)

受験番号

氏名

一、次の――線のカタカナ部分を漢字に直しなさい。

1 エイタンを下す。

2 駅伝のフク路を走る。

3 ロウホウによるごぶ。

4 サツコンの世界情勢。

5 初夏のことをバクシユウと呼ぶ。

6 キンカン楽器を使う。

7 田は日本のツウカだ。

8 ソ نداイな態度。

二、別冊の「文章一」を読んで、次の問いに答えなさい。(句読点や記号も一字と数えます。)

問一 ――線①「ものすごく小さくなってしまう」とありますが、どのくらい小さくなったのですか。解答らんに合うように十字で文章中から探し、抜き出して答えなさい。

だと思えるほどになった。

問二 空らん X に入る二字の言葉をこれより前の文章中から探し、抜き出して答えなさい。

問三 ――線②「小さなモンシロチョウ異変の原因であった」とありますが、この「原因」を筆者はどのように説明していますか。「アブラナ科の野菜類」という言葉を用いてくわしく説明しなさい。

問四 ――線③「モンシロチョウなら飛ばないはずの日かげや梢の上を飛ぶのである。捕まえてみるとスジグロシロチョウだった」について

(1) 「モンシロチョウ」と「スジグロシロチョウ」のちがいについて次の表にまとめました。空らんA・Bに当てはまる語句を五字以上十字以内で文章中から探し、それぞれ抜き出して答えなさい。ただし、Bは解答らんに合うように抜き出しなさい。

好むところ	「 B 」ところ	スジグロシロチョウ
もともとの生息地	「 A 」	森や林ばかりの日本

	A
B	

(2) 「スジグロシロチョウ」が「モンシロチョウ」の好むところを避けるのはなぜですか。その理由がわかる一文を文章中から探し、始めの七字を抜き出して答えなさい。

問五 ――線④「もつけの」の意味として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、今のところの イ、予定通りの ウ、思いがけない エ、これ以上ない

問六 ――線⑤「モンシロからスジグロへという種類に入れかわり」が起こった理由を筆者はどのように推測していますか。理由としてふさわしいものを次のア～オの中から二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア、東京には時々寒波がやって来て、モンシロチョウが冬を越せなかったから。
- イ、東京では高層建築が増え、日かげの多い林の中と同じ状況になったから。
- ウ、東京には近代的公園がつけられ、エサとなる植物が植えられたから。
- エ、東京ではまだまだ畑地が多く、田園地帯が広がっていたから。
- オ、東京には明治神宮のような自然の林に近い緑地や公園があったから。

問七 ――線⑥「心の安らぎ」とありますが、筆者はどのような状況に「心の安らぎ」を感じられると言っていますか。解答らんに合うように十五字以上二十字以内で文章中から探し、抜き出して答えなさい。

一枚目	
二枚目	
合計	

状況。

国語(二)

受験番号			

氏名

三、別冊の「文章二」を読んで、次の問いに答えなさい。(句読点や記号も一字と数えます。)

問一 ―― 線①「校がちらっとおれを見てきた」とありますが、このときの「校」の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、外でアイスを売っていると聞いて、食べたいと思っている。
- イ、女の子のお母さんが大変そうなので手を貸したいと思っている。
- ウ、小さな女の子が泣き叫んでいるのでめんどくさいと思っている。
- エ、先を急ぐので早く親子連れの横を通り過ぎたいと思っている。

問二 空らん A 〽 D に入る最もふさわしい言葉を次のア～カの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくり返すことはできません。

- ア、どきつと イ、ぎゅつと ウ、ぼつりと エ、ぼとりと オ、くるくると カ、すいと

A	B	C	D
---	---	---	---

問三 ―― 線②「かぶり」とは体のどの部分を表す言葉ですか。漢字一字で答えなさい。

問四 ―― 線③「ぼく」、―― 線④「お兄ちゃん」とありますが、だれのことですか。文章中から人名を探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

③	④
---	---

問五 ―― 線④「おれはぎゅつと目をつぶり、それからぼつと顔を上げた。階段を駆けのぼる」とありますが、この時「おれ」が決意したのはどんなことですか。解答らんに合うように七字でこれより前の文章中から探し、抜き出して答えなさい。

問六 ―― 線⑤「そっくり返った小さな体がおれめがけて降ってきた」とありますが、それはなぜですか。その理由がわかる一文を文章中から探し、始めの五字を抜き出して答えなさい。

問七 ―― 線⑦「押し問答」とありますが、ここでの「押し問答」の意味として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、しいちゃんが、お母さんの言うことを聞かないでイヤイヤをすること。
- イ、しいちゃんのお母さんと三人が、お互いに言い張ってゆずらないこと。
- ウ、しいちゃんが、絶対にアイスが食べたいと言って三人を困らせること。
- エ、しいちゃんのお母さんが、三人に何が欲しいかと何度もたずねること。

問八 空らん E に入る最もふさわしい年数を次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、一年 イ、四年 ウ、七年 エ、十年 オ、十五年

問九 ―― 線⑧「みんなの気持ちがあんなふうに思われる」とはどういうことですか。「みんなの気持ち」と「あんなふう」の具体的な内容がわかるようにくわしく説明しなさい。

--

問十 ―― 線⑨「さっきの親子がふたたびそこに立っていた」とありますが、「親子」は何のために「そこ」に来ていたのですか。文章中の言葉を用いて、解答らん¹⁰に合うように十字以上十五字以内にまとめて答えなさい。

--

問十一 ―― 線⑩「大人相手にするみたい」とありますが、「しいちゃんのお母さん」がこのような対応をするのは「おれたち」の態度をどのように評価しているからですか。それがわかる一文を文章中から探し、始めの七字を抜き出して答えなさい。

--

問十二 空らん F に入る言葉を文章中より探し、抜き出して答えなさい。

--